

## 白黒はつきりしなくても

岡田 里見

小学生の頃の友人で、いまだにつきあいのある人間は、私にはたった一人しかいない。小学校では三年間同じクラスになったことがあっても関わらず、当時は特別仲が良かった。でもなかつた。クラスの中では、スポーツができて活発な少女と、活発ではあつても特別目立つわけではない子やおとなしい女の子に分かれていた。彼女は小学生のバレエチームに入つており、私は元氣いっぱい駆け回つてはいても、体育はあまり得意ではなかつた。仲が良くなつたきつかけは覚えがないのだが、中学でも二年間同じ教室で机を並べていた。中学の頃、彼女は生徒会の副会長に片思いをしていた。とても色白で知的な、さわやかな感じのする少年だつた。その人とどうなつたのか詳しいことはわからないのだが、友達以上恋人未満といつた関係をずっと何年も続けていたようだ。

人の視知覚には「暗順応」というものがある。前者は、突然暗いところに行くとき、何も見えないが、だんだん眼が慣れてきて周囲が眼に映るようになるあれである。そうして、最初は見えなかつた美しい景色を、薄暗いながらも独特の風景として眼におさめるこ



のだが、その場は私も笑顔で「サンキュー」と中へ入った。

「さすがレディファーストの国」なんて思ったのは品物片手にレジに並んだ頃で、それまではずっと心の中で「ごめんなさい、ごめんなさい」と言っていた。

初めて黒人をあんなに間近で見て、その黒い肌がとても綺麗だと思った。光沢のある漆黒。あんなに綺麗な肌と純粋な笑顔を持つている人を、勝手に怖がって。

先入観、偏見とは恐ろしいもので、現実のその人を全く知らないにも関わらず、肌の色などで一括りにしてしまう。そしてそれは根強い。理性を押しつけて条件反射のように、感情が先に出てしまう。

先日、日も落ちて暗くなつた時分にシヨッピングモールへ出かけた際、店から離れた薄暗いところに黒人の若者が数人いた。

「あ、怖い」

先入観とは、恐ろしい。

件の彼女が、大学を卒業してから、カナダに1年間の語学留学に行った。

あれほど色白の副会長を一心に想い続け、白い肌を崇拜していた彼女が一年後に帰国して私に言ったのは、

「好みが変わっちゃった。やっぱり男の人は黒人じゃなきゃ」

人には先入観以上に、適応能力があるらしい。私は自分の一年後が楽しみだ。